

「学ぶこと」と「生きること」の統合

- 主体的に学び続ける集団へのアプローチ -

研究主題について

近年の社会の急激な進展は、社会のシステムのみでなく、子どもたちにも大きな変化をもたらした。PISA 調査や全国学力・学習状況調査にもわが国の子どもたちの学力の変容、長所や短所が表れている。このような状況の中、平成 20 年 3 月、文部科学省より新学習指導要領が出された。ここでは以下の 3 点を基本的な考え方としてあげている。

- ・ 教育基本法改正等で明確になった教育の理念を踏まえ「生きる力」を育成すること
- ・ 知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること
- ・ 道徳教育や体育などの充実により、豊かな心や健やかな体を育成すること

1 点目は基本的に現行学習指導要領の理念であった「生きる力」の育成を継続することを示している。2 点目では知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成を重点に挙げ、知識基盤社会における確かな学力の育成を重視することを示している。3 点目では、家庭や地域の教育力の低下に対応しようとするを示している。いずれも、近年の社会と子どもの変化、現在の実態からその課題を明確にし、解決を図ろうとしたものである。これらは平成 19 年 6 月に改正された学校教育法第 30 条の内容を具体化しようとするものである。

学校教育法第 30 条第 2 項

生涯における学習の基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともにこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うこと。

学校教育法や新学習指導要領の改正（訂）の要点を見ると、生涯にわたって主体的に学習に取り組む態度、すなわち学ぶことに対する意欲を喚起することは、その中心となるものとしてとらえられていることがわかる。これは、本校がこれまで「生きること」と「学ぶこと」の統合を目指し、自分にとっての「学びの意味」を実感させることによって、学習意欲の向上を図るとともに、生涯にわたって学び続ける意欲をもった生徒を育成しようとしてきたことと軌を一にするものと言える。

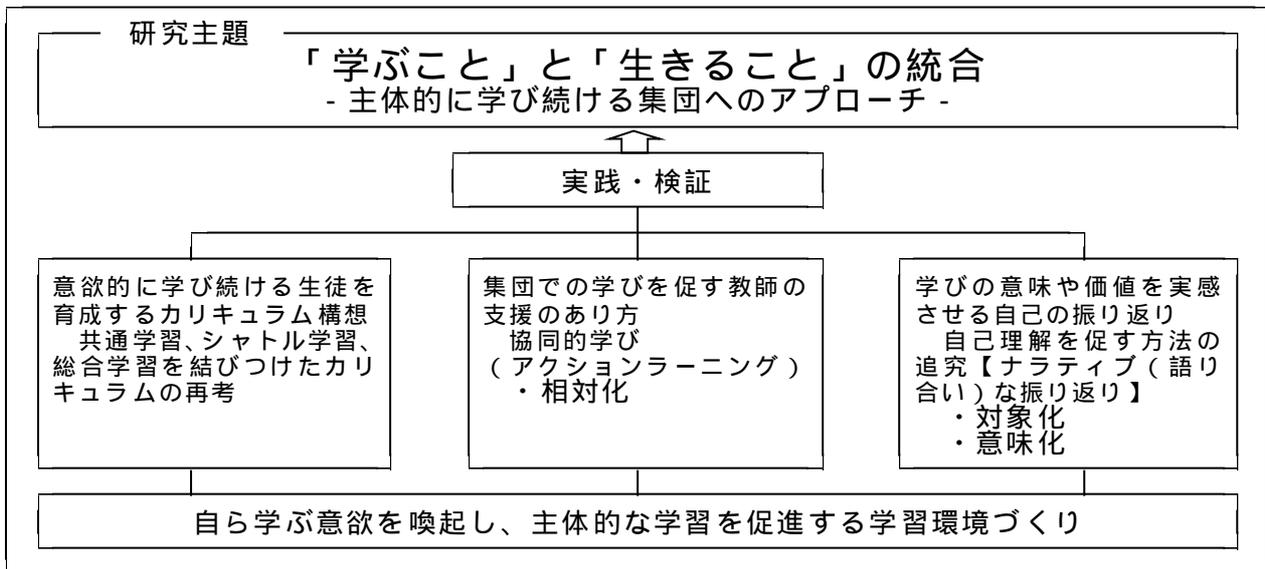
また、現在の子どもの姿を見つめると、そこには将来の自己実現の姿が見えず、学ぶことの意味や価値、楽しさを実感できずに、「何を学んでも人生も社会も変わらない」といった虚無主義や「一生懸命学ぶなんてばかばかしい」といった冷笑主義が蔓延している。これは、現代社会自体が、多くの知識を持つことを目指してきた「勉強」だけでは役に立たない社会へと変貌したことが大きな原因の一つであろう。その中で教育は「詰め込み」か「ゆとり」かといった中を振り子のように揺れてきたといえる。しかし、今求められているものは両者のいずれか一方ではなく、確かな知識や技能を基盤として、自ら主体的に学び、新たなものを生み出す力である。この点は、新学習指導要領にもその内容が見られる。

では、一体どのようにして現実の学校教育の中で実現するのか。確かな学びから、生涯に渡って学び続ける意欲へつなげる学校教育のあり方とはどのようなものか。この点について、これまでの研究の蓄積を生かしながら、確かな知識や技能の習得から自ら探究する学びへとつな

げるカリキュラム構築、様々な集団での学びの機会における教師の支援のありようを追究し、その中で、生徒自身に自分にとっての学びの意味や価値を実感させる取り組みを重ねていくことが、「学ぶこと」と「生きること」の統合につながり、これからの時代を創造していく生徒に、「生きる力」を育てていくことだと考えている。

研究の内容

研究の構想図



1 意欲的に学び続ける生徒を育成するカリキュラム構想

これからの時代を切り拓いていく生徒にとって重要となるものは、前述したとおり、生涯にわたって学び続けようとする意欲である。であれば学校教育において、学び続けようとする意欲を持った生徒をどのようにして育成していくのか。この点についてはさまざまな考え方、方法を用いて多くの試みがなされてきた。

生涯にわたって主体的に学び続ける人間 「学ぶこと」と「生きること」の統合

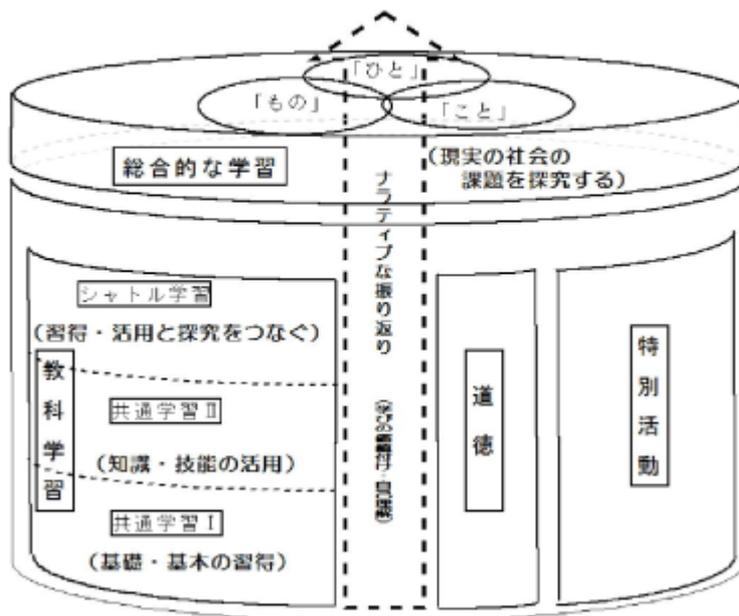


図1 カリキュラム構想

本校においても、平成8年度以来、「生涯学習」に視点をあてて研究を進めてきている。この間、時代の変遷とともに学校教育法や学習指導要領は改正（訂）され、さらに教育の対象となる生徒の姿も変容してきている。その中で現在の時代の要請に対応するカリキュラムとはどのようなものかについて研究を進めている。

新学習指導要領では、基礎的基本的な知識や技能を確実に習得させること、それらを活用して思考力・判断力・表現力を育成すること、さらには自ら主体

的に学ぼうとする態度を育てることが求められている。このことはすべての学校において考えていく必要のある課題である。しかし、多くの学校では基礎・基本となる知識・技能の定着に視点が偏り、主体的に学ぼうとする意欲や態度を持った生徒の育成が見失われがちではないだろうか。本校ではこれまで、学ぶ意欲を高めるためには確かな知識・技能の習得と同時に、自己の学びの意味や価値を実感させることが不可欠であるとして研究を続けてきた。本校研究の成果や課題、今求められる課題等を鑑み、習得・活用・探究を無理なくつなぎ、生涯にわたって学び続ける意欲を持った生徒の育成のため、今回、図1のようなカリキュラム構想を立てた。

各教科学習での確かな知識や技能の習得を中心的なねらいとする共通学習、そこで習得した知識・技能を活用し、より確かな知識・技能として定着させることを中心的なねらいとする共通学習、さらにこれらを通じて得たことを総合的に生かしながら、探究的な活動を行う総合学習を組み合わせることによって、習得から探究へと至る学びの流れを作ろうとした。

ここで課題となったのが、活用から探究へのステップアップにおいて、その段差が大きすぎはしないかということである。そこで18年度から20年度までの3年間、文科省研究開発指定を受け、研究を続けてきた異学年合同の発展的学習「シャトル学習」を活用から探究への橋わたしとして位置づけ、内容や学習方法を見直した。教科学習としての発展的題材内容を開発し、学びの方法としては、総合学習での探究的な学びにつながるものを各教科で用いることとした。このことによって、開かれた現代社会において、興味ある内容を自ら探究していく「総合学習」へスムーズに移行できるカリキュラムとした。

また、「シャトル学習」「総合学習」については、後期からスタートし、次年度前期にかけて行うサイクルとし、学びの方法や考え方などについて学習活動の中で新たに気づいたり、視野を拡充したりすることが自然発生的に起こるようなシステムを計画している。

表1 教科学習（「共通学習」「シャトル学習」と「総合学習」の関係

カリキュラム		視点	ねらい	学習課題	学習集団	学習形態	教師のかかわり
教科学習	必修	共通	知識・技能の習得	教師設定	同学年	一斉学習中心	教師主導
		共通	知識・技能の活用	生徒選択			
総合学習	選択	シャトル学習	知識・技能の活用から探究へ	生徒設定	異学年	個別学習中心 課題別グループ	教師支援 ファシリテーション (生徒主体)
		クラスター学習(仮)	現実の課題を追究する探究的な学び				

2 集団での学びを促す教師の支援のあり方

共通学習からシャトル学習、総合学習へと生徒の学びが広がり、より探究的な学習の実現をねらったカリキュラムでは、それぞれの学習における集団の構成や支援のあり方に違いをもたせ、生徒自身の知識・技能の定着に加え、見方や考え方も含め学び方を身に付けさせていく必要がある。それぞれの学習における教師の支援は、その学習のねらいによって変わってくるはずである。必修の学習である「共通学習」や「共通学習」における教師の支援をいかに行

うか。さらに、発展的学習となる「シャトル学習」における教師の支援をどう実施していくか。これらの学びの上に、開かれた現実の課題を探究する「総合学習」では、どのような支援を行うのか。主体的に学び続ける生徒を育てるために、これらのそれぞれの学習においてのねらいと方法を明確にしなが、各教科でのねらいと方法が「総合学習」での学びへとつながっていくよう、各教科の内容や特性をふまえ、関連性をもたせた支援のあり方について研究を進める。

3 学びの意味や価値を実感させる自己の振り返り

これまでの本校研究において、学びの意味や価値を実感させることをねらいとして学びの「意味化」を促す単元構築や「意味化の授業」について開発・実践を行ってきた。ここでは、学んできた内容が自分にとってどれほど価値のあるものかを気づかせる授業として実施してきた。前回は、学習する内容に対して生徒がどのように理解してきたか（概念を形成してきたか）について焦点をあて研究を進めてきた。当然これは、学びの意味や価値を実感させることにつながるという目的に向けて行ったものであるが、概念（学習内容）の定着に目がいき、自らの学びの意味や価値の実感という点において、十分とは言えなかった点がある。

そこで、今期の研究では、自らの学びについて自己の内面世界とのつながりを意識させ、その中でその学びが自分にとってどんな意味や価値があるかを感じさせる方法として、ナラティブな学びの振り返りを用いた方法を提案する。

図 自分にとっての学びの意味を実感させるナラティブ（語り合い）な振り返り

